

情報の森に子どもを迷い込ませる前に

長野県新聞活用教育(N I E)推進協議会長
信州大学学術研究院教育学系教授

松本 康



電子版の新聞を読むには新聞社のニュースサイトを直接読む方法と、紙版と同じレイアウトのファイルを「紙面ビューアー」を使って読む方法のふたつがある。ところが、電子版も「紙面ビューアー」を使って読まないで、なぜかニュースがうまく頭に入っていない。新聞社のニュースサイトには最新の記事がUPされていたり、過去の記事をさかのぼって見ることができたり、紙版のスペースでは収録しきれない記事が深掘りされていたりと、便利なことは便利なのだが、関連記事にうっかり手を出すと延々とリンクを踏み続けることになり、恐ろしく時間がかかる。その日のできごとの全体像もよくつかめないし、リンクを踏むたびにポップアップされる広告もわずらわしい。

新聞のコラムは、明朝体の縦書きに▼が挟まれるあの形式に味わいがある。社説欄もあの題字と形式でないと書き手の意気込みが伝わりにくい。1面のトップ記事や2面の特集記事も、横見出し、縦見出し、小見出し、リード文、図表、地図、写真、解説が一体となって、ひとつのテーマの全体像を伝えている。一言で言えば「わかりやすく伝える工夫」である。長い歴史の中で洗練されてきた「紙面」のレイアウトは、できごとを理解するために重要である。私たちは紙の新聞を読む時に、社会のできごとを「わかりやすく伝える工夫」（情報のレイアウト）の助けを通して読んでいる。

この工夫の中身はおおよそ三つある。第1は「一覧性」。紙面を広げてトップ記事から小さな記事までの大きさと順序、見出しなどのレイアウトによって、できごとの全体像が一目でつかめる。第2は記事の「逆三角形の構造」。逆三角形の上から重要度の順に、見出し、リード文、本文が位置する。新聞を広げて見出しとリード文を読むと、短時間で概要を頭に入れられる。第3は記事の「重みづけ」。大きさと配置（順序）がその記事の重要性を示す。

新聞社のニュースサイトは各社の試行錯誤を経て、速報性のあるニュースをスマホのように小さな画面でも読めるレイアウトに落ち着いてきた。そのためか、トップ画面を見ても全体像はつかめず、よほど大きなディスプレイで見ない限り「一覧性」は弱い。記事は「逆三角形の構造」の流儀に沿って書かれてはいるが、トップ記事以外は見出しに大きさの違いはなく、リンクを踏まないでリード文も本文も読めない。Yahoo!ニュースやGoogleニュースのようなニュースサイトは、通信社、新聞社、雑誌、TVなどのメディアの記事をカテゴリ別に網羅して幅広く読める利点があるが、広告上の理由を除けば、記事の扱いに重みをつけずに、フラットに伝えようとしているように見える。

情報化社会の特徴のひとつに「フラット・インポートランス現象」（佐伯胖,1992）がある。情報の重みづけや発信者の違いがそぎ落とされ、すべての情報が等価に扱われると、かえって何が重要なことなのか判断しにくくなることを意味する。政治の記事とアニメの記事は新聞の紙面では扱いが大きく異なるが、ニュースサイトのリンクとしては横並びで差がない。本当に大切な情報とは何なのか。錯綜する情報の森に子どもを迷い込ませる前に、「わかりやすく伝える工夫」に満ちた新聞を使って、じっくりと考える機会を作ってほしい。